

漱石全集
三十卷

書簡集

四

全三十四卷 第三十回配本

昭和三十二年八月十二日 第一刷發行 ©

漱石全集 第三十卷

定價一五〇圓

著者 夏目漱石

發行者 岩波雄二郎

印刷者 山田一雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三

株式
會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

目次

明治四十四年

三

明治四十五年 大正元年

七

大正二年

一五

書簡番號索引 四

三三

解 說

二四

注 解

二七

明治四十四年

一一八五

一月一日 日 後(以下不明) 牛込區早稻田南町七より

小石川區雜司ヶ谷一一一狩野亨吉へ〔印刷のはがき〕

恭賀新年

昨年來度々御見舞に預り難有御禮申上候尙目下引
續き入院中につき萬事缺禮仕候

明治四十四年正月元旦 夏目金之助

牛込區早稻田南町七番地

一一八六

一月 麴町區内幸町胃腸病院より 本郷區駒込千駄木町森

林太郎へ〔封筒表側に「森田草平氏持參」とあり〕

新年の御慶目出度申納候

修善寺にて病氣の節はわざ／＼御見舞を忝ふし拜謝
の至歸京後はとくに貴著を給はり是亦深く御禮申上候
參上の上親しく御高話も可承の處未だに在院中にて諸
事不如意今度出版の拙著森田氏に托し左右に呈し候御
藏書中に御加へ被下候はば幸甚に候 艸々頓首

四十四年正月〔封筒の裏に「十二月三十一日」
とあり〕 夏目金之助

鷗外先生

座右

一一八七

一月(日附不明) 6-7 麴町區内幸町胃腸病院より

埼玉縣南埼玉郡鷲宮村宮寛へ〔はがき〕

謹賀新年

去臘は無斷にて大兄の手紙をホト、ギスへ送り失禮

致候

一陽と共に御病苦のなからん事を祈候

元日

一一八八

一月二日 月 後4—5 麴町区内幸町胃腸病院より

鹿 兒島市第七高等學校野間眞綱へ〔印刷したる年賀狀の端に〕

修善寺の御見舞後引きつゞき生き延び候、御安心願
上候

一一八九

一月二日 月 後4—5 麴町区内幸町胃腸病院より

鹿 兒島市春日町八七皆川正禰へ〔印刷したる年賀狀の端に〕

漸く生き延び候、一句かき可申候

一一九〇

一月三日 火 前11—12 麴町区内幸町胃腸病院より

牛 込區矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

正月早々苦情を申候。われ等は新らしきものゝ味方に候。故に「新潮」式の古臭き文字を好まず候。草平氏と長江氏はどこ迄行つても似たる所甚だ古く候。我等は新らしきものゝ味方なる故敢て苦言を呈し候。朝日文藝欄にはあゝ云ふ種類のもの不似合かと存候

一一九一

一月五日 前10—11 麴町区内幸町胃腸病院より

牛 込區 矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

小言を豫期して書かれてはたまらない。あんな書方は「新潮」式だから「新潮」式と申すにて古臭き故に古臭きに候

*石井のをくれと云はれてすぐ日取をかへてあしたに出した動機が——文藝欄にとられては厭だといふ了簡なら玄耳は氣の毒な男なり。君たしかにさう思ふか

一一九二

一月五日 木 後1—2 麴町區内幸町胃腸病院より 佐

賀縣神埼郡三田川村苔野行徳二郎へ〔印刷したる年賀
狀の端に〕

くれには御母上と御令妹も御病氣のよし嘸御難儀と
存候

私は次第によろしく候、御歸りの節御目にかゝり可
申候

一一九三

一月六日 金 前10—11 麴町區内幸町胃腸病院より 下

谷區上野櫻木町二八阿部次郎へ〔はがき〕

賀正 (門差上てもよろしく候、期御面會の日)

御風邪の由御大切に可被成候。五日の拙稿御ほめに
預かり難有候、小生老人を以て自ら居り大兄青年を以
て自ら任ず、左すれば小生の書いたものが一回だも君

の氣に入るは、却つて小生の若き所を曝露したるに等
し。呵々。

趣味は年に従つて變ず、永き年を通じて融通の利く
趣味を有するものは其人の幸福に候。二十五の時は二
十五の趣味、三十の時は三十の趣味丈ならばあまりい
き苦しく候。

一一九四

一月八日 日 前9—10 麴町區内幸町胃腸病院より 牛

込區矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

昨七日夜出したる「思ひ出す事など」二十四の末に
ある詩

秋露下南澗 黃花粲照顏

欲行沿澗遠 却得與雲還

のうち○をつけた却の字を還と間違へて書いたかも知
れず。もし間違つてゐたら御正し下さい

一一九二

一月五日 木 後1—2 麴町區内幸町胃腸病院より 佐

賀縣神埼郡三田川村苔野行徳二郎へ〔印刷したる年賀
狀の端に〕

くれには御母上と御令妹も御病氣のよし嘸御難儀と

存候

私は次第よろしく候、御歸りの節御目にかゝり可

申候

一一九三

一月六日 金 前10—11 麴町區内幸町胃腸病院より 下

谷區上野櫻木町二八阿部次郎へ〔はがき〕

賀正 (門差上てもよろしく候、期御面會の日)

御風邪の由御大切に可被成候。五日の拙稿御ほめに
預かり難有候、小生老人を以て自ら居り大兄青年を以
て自ら任ず、左すれば小生の書いたものが一回だも君

の氣に入るは、却つて小生の若き所を曝露したるに等
し。呵々。

趣味は年に従つて變ず、永き年を通じて融通の利く
趣味を有するものは其人の幸福に候。二十五の時は二
十五の趣味、三十の時は三十の趣味丈ならばあまりい
き苦しく候。

一一九四

一月八日 日 前9—10 麴町區内幸町胃腸病院より 牛

込區矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

昨七日夜出したる「思ひ出す事など」二十四の末に

ある詩

秋露下南澗 黃花燦照顏

欲行沿澗遠 却得與雲還

のうち○をつけた却の字を還と間違へて書いたかも知
れず。もし間違つてゐたら御正し下さい

だ。まづ妻君も妻君の御兩親も至つて平和さうで何よりも目出度い心持である。折角山と海で養生して旨く三度の食事が出来る様にならん事を希望する。昨夜から雪で今は市中眞白になつてゐる。逗子も天氣がわるいのぢやないか知らんと思ふ。

獨乙へ手紙を出す。英國へたよりに書く。森田に小言を云ふ。知らぬ人の書翰に禮の返事を出す。それやはやで今朝は病院も大分多事、長い御返事も出来ない。小宮は歸つた朝すぐ芝居へ行つたさうだ。大將どう云ふ了見かな。君は妻に先生は中々政畧が上手になつたと云つたさうだ。妻に松本の西洋料理を奢つたさうだ。森成さんから越後の謙信の話を大分聽いて面白かつた。町井さんが脉をとると脉が急に早くなるのは事實です。大方化物に捕まつたと思ふせらうと云ふ事に歸着した。 艸々

二十日

金之助

三郎様

奥様にも御老人にもよろしく。逗子杯へ引込んで畠を作つてゐられる人は眞に羨ましい

一一九八

一月二十四日 火 後(以下不明) 麴町區内幸町胃腸病院

より 牛込區矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

過日手紙にて申上たる件につき御協義^原仕りたし。妥協の道あらば成案を持つて御來院を乞ふ。

一月二十四日

一一九九

一月二十九日 日 前7―8 麴町區内幸町胃腸病院より

兵庫縣御影町前川清二へ

拜啓先日御申越に相成候拙句御依頼通原稿紙に認め御送申上候兩方共認め候につき御氣に入りたる方を御存しあまれるを御扯捨被下度候御氣に召し給はずは猶幾枚にても書き直し可申候 草々頓首

一月二十八日

夏目金之助

前川清二様

一一〇〇

二月一日 水 前10—11 麴町区内幸町胃腸病院より 千

葉縣成田町成田中學校鈴木三重吉へ

新年早マストライキがあつた由學校の教師をすれば是から同様の事が何度となく起るものと思はなければなるまい。今は世の中の門口を潜つた許りだ。第一の經驗として興味のある事件と思ひ給へ。和尚さんが君を辭職させないのは好い。生徒を罰しないのも好い。君も平氣で居れ。

此月二十六日に退院の都合、何故二十六日といふと妻が易者の所へ行つて見てもらつたのださうだ。夫で差支ないからうらなひの云ふ通り妻の申す通りにする積である。二三日東京は大變暖かい。暖かいと戸外へ出たくなる。 艸々

二月一日

金之助

三重吉様

一一〇一

二月一日 水 前10—11 麴町区内幸町胃腸病院より 鹿

兒島市春日町一・二六皆川正禧へ〔はがき〕

好い家に御引移のよし。此方はまだ入院中。二月二十六日に出る筈。體重十五貫弱。毎週増加の模様。是ならば當分生き延る事に候。野間君へよろしく

一一〇二

二月一日 水 前10—11 麴町区内幸町胃腸病院より 名

古屋市島田町田島道治へ〔はがき〕

此方よりも御無沙汰御新婚御目出度存候猶病院にあり、二月末退院の筈。謹んで御夫婦の御清福を祈る。

一一〇三

二月一日 水 前(以下不明) 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區早稻田南町一〇飯田政良へ〔はがき〕

長い手紙を難有う。長い手紙を書きたいが色々用事があるから是で失禮する。僕は此月末に退院する。あつたかくなると戸外へ出たい。澤山金を持つて遊んで暮したい。

一一〇四

二月二日 木 麴町區内幸町胃腸病院より 牛込區早稻田

南町七夏目鏡へ

着物と草履と雑誌は受取つた。大嶋の着物を不斷着にする程悪くして仕舞つたのかな。あの羽織のがらは嫌だ。買ったものだから仕方がないから着る。實はドテラももう大なしになつたよ。どうせ仕着るなら大嶋もよこして呉れ。

眼がまはつて倒れる杯は危険だよく養生をしなくては不可ない。全体何病なのか。具合が少しよくなつた

ら、よくなつたと郵便で知らせて呉れ。御前が病氣だと不愉快で不可ない。あまり天狗などの云ふ事ばかり信用しないがい。

うたひの本は病院で大聲を出して謠はれもせんから寄こしても大丈夫である。夫からはからさき一年やめろなら已めてもいいが、やめる必要もないならやる方がい。醫者に聞いて見る。

あつたかになると病院が急にいやになつた。早く歸りたい。歸つても御前が病氣ぢやつまらない。早くよく御なり。御見舞に行つて上げやうか。

子供へ皆々へよろしく

二月二日 金之助

鏡子どの

一一〇五

二月三日 金 前10—11 麴町區内幸町胃腸病院より 府

下巢鴨町上駒込三三四野上豊一郎へ〔はがき〕

拜啓其後御無沙汰。小生豫約の謠本に加入の旨能成を通じて申込たる處其後一向音沙汰なき模様、あとから一度に金を取られるのは恐れるが、序の時一寸幹事に聞き合せて呉れ玉へ 艸々

一一〇六

二月四日 土 麴町區内幸町胃腸病院より 牛込區早稻田南町七夏目鏡へ

着物届き候。大嶋の衣物と下着とはよく考へると實は不用に候。然し此方へ取つて置き候。

大嶋の下に着る下着の胴の色あれでは羽織の裏の如く原甲斐絹と同様にて見悪く候。白茶か、あらい模様宜した申したる積に候。元の大嶋の羽織を不斷に着る程わるくなり候や。夫よりも只今着てゐる鐵色の方わるくならずや。又不斷着ならば支那のケンドン原の重い方が結構かと存候。いづれ歸つて見た上に致すべく候。

羽織の方チョイ／＼着なればあの裏にては駄目に候

あれは下等な風呂敷の模様原に候。いつか取り換たく候。織屋から買つた糸織とかの不斷の羽織とかはどうなり候や。それへあの裏をつけたら好からうと存候。

謠本は病院では大聲で謠へる筈なく候。只退屈故申入候。森成さん抗議を申込み候も差支なく候。常識なき醫者の忠告に候。取合ふに及ばぬ事に候。謠本はとぢたもの宅に餘り候を二三冊入用と申候。以上

二月四日

金之助

鏡子殿

一一〇七

二月九日 木 前10—11 麴町區内幸町胃腸病院より 牛込區矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

御序の節原晴瀾氏の原稿を本人へ御返しのため、又タツミ氏に依頼されたるものを届ける爲め、社に出らるゝ前一寸御立寄願候

一一〇八

二月十日 金 後(以下不明) 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區早稲田南町七夏目鏡へ

拜啓本日回診の時病〔院〕長平山金三先生と左の通り

談話仕候間御参考のため御報知申上候。

旦那様「もう腹で呼吸いきをしても差支ないでせうか」

病院長「もう差支ありません」

旦那様「では少し位聲を出して、——たとへば謠な

どを謠つても危険はありますまいか」

病院長「もう可いいでせう。少し習ならして御覽なさい」

旦那様「毎日三十分とか一時間位づゝ遣やつても危険

はないですね」

院長「ないと思ひます。もし危険があるとすれば、

謠位や已めて居たつて矢張り危険は來くるので

すから、癒なほる以上は其位の事は遣やつても構

はないと云はなければなりません」

旦那様「どうですか。難有うう」

右談話の正確なる事は看護婦町井いし子嬢の堅く保

證するところに候。して見ると、無暗に天狗と森成大

家ばかりを信用されては、亭主程可哀想なもの又と

あるまじき悲運に陥る次第、何卒此手紙届き次第御改

心の上、萬事夫ちよに都合よき様御取計被下度候 敬具

二月十日午後四時町井いし子立たちあ會の

上にて認む

夏目金之助

奥様へ

一一〇九

二月十二日 日 後6—7 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

風葉は謝絶になり候や。夫にて可然事と存候。つぎ

は貴兄御書きあるべく候。池邊氏と談合の上必要の猶

豫を得らるゝもよろしく候。先日申上候もの取に御立

寄ならず。如何なされ候や。端書一枚位は書くひま有

一一一〇

二月十三日 月 前11—12 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

原稿料送ルニ及バズ

衛藤東田の「新ラオコーンに就て」とか云へるもの前後三回に渡りて興の覺めたるものかな。出來得る限り以來こんなもの没書可被成候。又ロマンチズムと云ふ言葉ありやクラジツクとも云ふや

一一一一

二月十三日 月 後8—9 麴町區内幸町胃腸病院より

麴町區元園町一丁目武者小路實篤へ〔はがき〕

*御目出度人御惠投たしかに頂戴御禮を申します。私は段々よろしくなります。今月二十六日に病院を出て人間界に入ります 草々

二月十三日

一一一一

二月十三日 月 後8—9 麴町區内幸町胃腸病院より

本郷區森川町一小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

一月の *Bühne und Welt* が來た それは結構だが去年の十一月の *Deutsche Rundschau* が來たには驚ろいた。君は全體何月號迄よんだ。森田が間違へて *Neue R. S.* をたゞの *R. S.* として引繼ぎ注文をしたのではないか。一寸御聞合せ申し候

一一一一

二月十四日 火 前10—11 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六二森田米松へ〔はがき〕

長耳生のカベルマン音樂會評中に曰く雀羅。孟求を轉るに似たりと。

雀羅とは雀を捕る網の事なるべし。アミが轉るとは

不可思議千萬に候。又孟求と云ふもの見たる事なし。蒙求の誤ならん。君が書けるにや東がかけるにや。好加減な事ハヨス方ガイ、

一一一四

二月十七日 金 前8—9 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區早稻田南町一〇飯田政良へ〔はがき〕

御手紙拜見致候。御申越の件は至極よろしからんと存候。出來得る丈早く御取極可然かと存候。右御返事迄。私は二十六日に退院致候

一一一五

二月十七日 金 後2—3 麴町區内幸町胃腸病院より

本郷區森川町一小吉館小宮豊隆へ

武者小路から御目出度人と云ふのを送つてくれた。戀の進行を明らかに書いたものである。今の作家の戀を打ち明けたのものは大概世にすれからした萬事を

心得顔(ことに女性を)の主人公か又は墮落生と同程度の徳義心を持つた主人公である。然るに是は若い、女を知らない、相當の考のある、純粹な人の戀を其儘書いたものである其所に價原がある、君讀んで見ないか、森田の見た様に無暗にがらないから好い。

夫から鷗外から烟塵といふものをくれた。此前の消滴といふのももらつてある。

以上三書に就て何か書くなら書いて見ないか 艸々
二月十七日 金之助

豊隆様

一一一六

二月二十一日 火 麴町區内幸町胃腸病院より 文部省學

務局長福原鏝二郎へ

拜啓昨二十日夜十時頃私留守宅へ(私は目下表記の處に入院中)本日午前十時學位を授與するから出頭しと云ふ御通知が参つたさうであります。留守宅のも

のは今朝電話で主人は病氣で出頭しかねる旨を御答へして置いたと申して参りました。

學位授與と申すと二三日前の新聞で承知した通り博士會で小生を博士に推薦されたに就て、右博士の稱號を小生に授與になる事かと存じます。然る處小生は今日迄たゞの夏目なにがしとして世を渡つて参りましたし、是から先も矢張りたゞの夏目なにがしで暮したい希望を持つて居ります。従つて私は博士の學位を頂きたいくないのであります。此際御迷惑を掛けたり御面倒を願つたりするのは不本意でありますが右の次第故學位授與の儀は御辭退致したいと思ひます。宜敷御取計を願ひます。 敬具

二月二十一日

夏目金之助

專門學務局長福原錄次郎殿^原

一一一七

本郷區森川町一小吉館小宮豊隆へ

拜啓からだを大事にしろとの御忠告御尤なり、隨分氣をつけてゐる積なり(笑ふ勿れ)木曜會で菓子を食べはあの位食つても差支ないと云ふ自信ある故也否あの位儉約したつてどうせ胃はよくならないと云ふ信念ある爲なり、わるい信念なり出來^原丈撤回に力むべし

夫から別問題に就て 女に對する戀が徹底とか猛烈だとか云ふ分子さへあれば戀で、其他のわるい處があつても戀だと云ふのは勝手だが是丈が戀だと思ふのは間違だよ。

君の云ふ事は好惡の區別であつて戀になるならぬの問題ぢやない。茶が好きなものを見て何でもブランドの様にはリリツカなくては飲料でないと云ふのは可笑しいぢやないか。

武者小路のは不徹底ぢやない、あれ程徹底する事は君にや出來ない、只内氣で亂暴を働かない丈である。そこに初心の可愛らしい處があるのである。あれを眞

二月二十四日 金 前9—10 麴町區内幸町胃腸病院より